

## 琳派と印象派 東西都市文化が生んだ美術

アーティゾン美術館（東京・京橋） 2020. 11. 14～2021. 01. 24

琳派は、17世紀の「俵屋宗達」や18世紀初めの「尾形光琳」らによって、日本の都であった京都の町文化として生まれ、19世紀初めに「酒井抱一」や「鈴木其一」らにより、将軍のお膝元の江戸（現在の東京）に引き継がれて“装飾的な美感を核として発展した都市の美術”であった。

一方、印象派は19世紀後半のフランス・パリを中心に「マネ」「モネ」「ドガ」「ルノアール」「セザンヌ」らによって、日常的な経験を通して受ける印象や市民生活の喜びを率直に表現する新しく起こった欧州の近代美術であった。

本展は、日本と欧州の都市文化が生んだ天才画家たちの作品を通して、大都市ならではの洗練された美意識の到達点を比較しつつ見渡そうとする試みで、国宝「2点」重要文化財「6点」を含む「100点」の作品で構成されている。

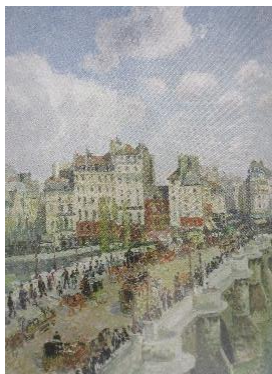


俵屋宗達《風神雷神図屏風》国宝 尾形光琳《孔雀立葵図屏風》重文

宗達の絶妙な筆は、右に風神左に雷神を対峙させて疾風を呼び、雷鳴をとどろかせる二神を目一杯画面の両端上方に置き、中央の二扇分を空けて広々とした空の空間を設けている。作品は、緊張感ある構図、落ち着いた色調、のびやかな描線に雲の柔らかい質感を表現している筆技は誠に見事である。

光琳の作品の左隻は、立葵の花が横一列に配されてやや様式的な雰囲気を感じさせ、右隻は羽を大きく広げた雄の孔雀と首を低く垂れた雌の孔雀の醸し出す雰囲気が何とも言えない感動を呼び起こしている。

カミーユ・ピサロ《ボン・ヌフ》1902年 油彩/カンヴァス



画伯は、19～20世紀の現実主義の風景画家「コロー」「クールベ」「ミレー」などの影響を強く受け、若い画家に大きな影響を与えたフランスの近代画家の中で重要な橋渡しをした巨匠である。晩年は、都市の街並みが絵画の新しいモチーフとして登場し、ホテルの部屋の窓からセヌ川に架かるボン・ヌフを行き交わる群集を、小さな筆致で光の影響の束の間の振動を引き立たせて繰り返し描かれている。